奈良盆地のノガミ行事

黒　田　一　充

滋賀県湖東地域から京都府南部、奈良県にかけての地域では、ノガミ（野神）とよぶ聖地をまつる信仰がある。その多くは、樹木がある塚や杜である。

滋賀県日野町中山では、９月１日に野神山の頂上にある祭場に、集落内の東谷と西谷地区の若者たちが、それぞれの地区で栽培した里芋を孟宗竹に括って持ち寄り、その茎の長さを競う芋くらべ祭りがおこなわれる（写真１）。長さを測るだけだとすぐに終わりそうだが、２時間以上をかけてさまざまな儀礼がおこなわれる。

写真１　中山の芋くらべ祭り（2003年撮影）

このほかにも、滋賀県では７月下旬から９月上旬にノガミの行事があるのに対し、京都府や奈良県は５月か６月の上旬が多く、端午の節句にあわせて男の子たちが主体となっておこなわれている。

奈良県では、奈良盆地とその周辺部に見られ、ヨノミ（榎）の木をまつる所が多い。古い地図などには「野神」や「農神」の字があてられており、ノガミサンあるいはノーガミサンと敬称を付けてよび、ここでの行事の名称にも使われる。

写真２は大和郡山市椎木（しぎ）町の西椎木のノガミサンで、ヨノミの木に祠がまつられており、周囲には水田が広がっている。この場所は、西隣の安堵町との境に位置している。

写真２　椎木町のノガミサン（2014年撮影）

天理市平等坊町では、近鉄天理線の南側に広がる田畑の一画にノガミサンがあり、５月５日に藁蛇（ジャ）を納める（写真３）。ここにはかつてヨノミかムクノキが立っていた塚だったが、樹木がなくなって土が崩れ出したため、周囲をブロックで囲んで現在の形になっているという。

ノガミの行事では、藁蛇を作ってヨノミの木に巻きつけ、ミニチュアの農具を納めることから、農耕儀礼と考えられているが、村境に藁蛇をまつる信仰は、年の初めに綱や縄を村の入り口の道路や川の上に渡して張る勧請縄の行事と共通している。奈良県教育委員会の文化財調査報告書『大和の野神行事』（1986年）には、行事が残っていないものも含めて52か所の報告が

写真３　平等坊町のノガミサン（2008年撮影）

写真４　蛇穴のノグチサン（1987年撮影）

されているが、その中には勧請縄と区別しにくいものも含まれている。

御所市蛇穴（さらぎ）の行事はノグチサンとよばれ、５月５日の朝から野口神社の境内で藁蛇（蛇綱）を作る。前日に頭だけを作って当屋の床の間でまつっておき、当日は胴の部分を延ばして約15メートルの長さにする（写真４）。蛇が完成すると、子どもたちが中心となって集落内の各家へ引きまわしていく。夕方になって神社に戻ると、昔は境内の樫の木に蛇を巻きつけたが、現在は境内の蛇塚とよばれる場所に、とぐろを巻かせて納める（写真５）。

田原本町鍵の行事は蛇巻きとよばれ、６月第１日曜の午前中に八坂神社の境内で藁蛇を作り、午後から子どもたちが中心に担いで廻る。蛇の頭は藁５束で作り、胴体の太さは約30センチメートル、長さは約15メートルになる。

写真５　野口神社境内の蛇塚（2005年撮影）

写真６　鍵の蛇巻き（2014年撮影）

藁蛇の頭の重さは約200キログラムにもなるため、中学生、高校生に大人たちも加わって担ぎ、尾は年少の子どもたちが担ぐ（写真６）。蛇の前方には、２人の中学生が土産（どさん）箱を先端に括り付けた青竹を担いで進み、結婚や出産など、この１年間にお祝い事のあった家に寄り、その玄関に土産箱を突っ込んでお祝い事を述べ、お祝儀をもらう。この土産箱には、鍬や鋤・鎌など樫の木で作ったミニチュアの農具を入れる。集落内を廻って西端のハッタハンとよばれる場所に着くと、蛇の頭を地面に下ろし、尾をヨノミの木に巻きつける（写真７）。

鍵の行事が終わるころ、北西隣の今里の集落でも藁蛇が完成し、ワカメの味噌煮が参拝客に配られる。その後、杵築神社を出発して藁蛇を担いで廻る。こちらの蛇の頭は、鍵ほど大きくないため、お祝いをする家には蛇の頭を突っ込んでいる（写真８）。今里のノガミは、北東の村はずれに近い場所にあったヨノミの木だったが、枯れてしまったため、戦後は神社の境内にあるヨノミの木に巻きつけ、根元の小祠にミニ

写真７　鍵のハッタハン（2002年撮影）

写真８　今里の蛇巻き（2002年撮影）

写真９　ヨノミの木の小祠をまつる（2002年撮影）

チュアの農具と牛馬を描いた絵馬を奉納する（写真９）。

蛇や龍は水神であり、とくに蛇は古くから三輪山の神の正体だとされてきたことから、農業に適した雨が降るように祈るのと、村境で外部からの悪いものの侵入を防ぐことから、このような祭りの形になったのであろう。

藁蛇を担ぐのではなく、駕籠に乗せて運ぶ所もある。川西町下永では西城（にしんじょう）と東城（ひがしんじょう）の地区で６月第１日曜日にキョウとよばれる行事がある。キョウは、行事のあとで地区の人たちが食事会をすることから、ごちそうを意味する「饗」が行事名になったとされている。

ここでは麦藁の蛇をジャジャ馬とよんでおり、西城では竹に巻いて集落の北側、初瀬川の対岸にあるノーガミサンへ運び、そのまま頭を上にしてヨノミの木に立て掛ける（写真10）。それに対して、東城ではジャジャ馬を駕籠に乗せ、集落東側のノーガミサンへ運ぶ（写真11）。駕籠は竹製で、センダンの小枝で覆って子どもたちが担ぐ。藁蛇を駕籠に乗せる事例は、奈良盆地ではここだけである。

写真10　下永・西城　ノーガミサンに奉納されたジャジャ馬（2014年撮影）

写真11　下永・東城　藁蛇を乗せた駕籠（2006年撮影）

写真12　下永・東城　粽をまく（2006年撮影）

写真13　上品寺町のシャカシャカ祭り（2005年撮影）

ノーガミサンでの神事が終わると、はったい粉（麦こがし）をマコモの葉に包んだ粽（ちまき）が撒かれ（写真12）、拾った人は自分の家の軒に吊して蛇除けにするという。蛇をまつる祭りで、蛇除けは奇妙に感じられるかもしれないが、端午の節句に粽を吊してマムシ除けや虫除けにする民俗である。

このような藁蛇を担いで廻る行事は、橿原市上品寺（じょうぼんじ）町のシャカシャカ祭り（写真13）などでも見られるが、三宅町石見では稲藁に杉葉を挿して蛇に見立てるなど（写真14）、藁蛇の頭部が省略される所もある。

天理市新泉町では、集落の外れに位置する素盞嗚（すさのお）神社の境内で５月３日におこなわれる。ここでは、麦藁で牛・馬・ジャジャ馬（ムカデとも）を、竹で小さな唐鋤・馬鍬・梯子を作り、祠の前に設けた小さな砂場で農具や牛馬を使って農作業の所作をおこなう（写真15）。最後に

写真14　石見のジャ（2008年撮影）

写真15　新泉町のノガミ行事（2014年撮影）

馬を走らせて３周した後、祠の周りに藁の作り物やミニチュアの農具を納める。年の初めのおんだ祭りでよくおこなわれる農作業の模擬儀礼で、収穫を願う予祝の儀礼である。境内には小さな土俵も設けてあり、かつては子どもたちの相撲があったようである。

こうして記すと、どの地区でも行事が盛んにおこなわれているように見えるが、実際には子どもの数が少なくなって省略されるようになった行事も多い。

橿原市地黄町では、参加した男児たちが墨を付け合うスミツケ（ススツケ）祭り（写真16）が中止になり、ノガミへ藁蛇を納める行事だけになっている。鍵の蛇巻きも、参加する中高生の数が減り、2002年には１時間ちょっとで村中を廻ってハッタハンに到着していたが、昨年（2014年）は休憩を入れながら倍の時間がかかっていた。人口の減少は、子どもの行事の伝承に大きな影を落としている。

写真16　地黄町のスミツケ祭り（2002年撮影）

文学部教授